

# いつも一緒 富山のペットたち

みなさんは愛犬がせきをしていたら、「寒かったのかな」「風邪でもひいたのかな」と思われるのではないのでしょうか。

ただし犬には風邪といわれる病名はありません。犬の風邪のような症状は、人とは異なり特定のウイルスや病気が原因で起こるからです。人の風邪が犬にうつることも、その逆のようなことは基本的には起こりません。



吉田動物病院院長  
(射水市小島)

季節に関わりなく、せきが出る病気の例としては、高齢の小型犬の場合、心臓が肥大する病気があります。このほか、肥満で症状が悪化して気管がつぶれる病氣、蚊からうつされて心臓に虫が入る病氣、水がたまったり、できものができたりすることもある肺や胸の中の病氣もあります。

## 冬季の犬のせき



## 吉田 俊一

わる危険な病氣もありますので、特に初めて冬を迎える子犬や抵抗力が低下している高齢犬の場合は気を付けてください。

### 肺炎や下痢に

中でも犬ジステンパーは最も危険な感染症で、空気感染や、感染した犬の鼻水、目やに、よれた環境下なら、気温が4度でだれなどから直接うつることが

あります。症状は発熱や食欲不振といった一般症状に始まり、激しいせきを伴う肺炎などの呼吸器症状、嘔吐や下痢などの消化器症状、神経発作のため、死亡するケースもあります。

かっています。このため、気温が下がる冬季が問題になります。また、ケンネルコフといわれる伝染性気管支炎は、犬がたぐさんる環境で感染する病氣です。空気感染が主ですが、病氣の犬との接触でもうつります。症状は乾燥した短いせきが特徴で、数日から数週間持続します。時には数カ月間せきが続

# ワクチンと防寒対策を

き、肺炎を併発することもあります。

### 接種で免疫持続

これらの病氣の予防にはワクチン接種が重要ですが、ケンネルコフの場合は複数の原因があり、これまでのワクチンだけでは対応できません。今年10月、この病氣の主な病原菌に対する新しいワクチンが、点鼻用として生後1カ月前から投与できるようになりました。今後に期待できます。

いずれにしても、子犬の1年目は、適切な時期に複数回のワクチン接種が必要です。成犬や高齢犬でも、免疫を持続させるためのワクチンの追加接種は大切です。ワクチンの種類や接種時期については、動物病院に相談してください。

最後に防寒対策についてです。屋外飼育なら、犬舎の入り口を覆って冷たい風や雪の侵入を防ぎます。中に毛布を敷いたり、夜間は玄關の中に入れておくことも大事です。

室内飼育でも、夜間に暖房を切った時の冷え込みには注意しましょう。外出時には、防寒着を着せたりして室内との極端な温度差に気を付けます。無理をしてまで散歩に出ることは控えてください。

2013(平成25)年12月5日  
北日本新聞

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。